
第10回公開研究会

テーマ ICT×インクルーシブ教育
—教室と保健室で見守る子どもの学び—

発表者 鈴木 秀樹 東京学芸大学附属小金井小学校教諭
佐藤 牧子 東京学芸大学附属小金井小学校養護教諭

発表概要

保健室に来ている子どもたちがどのようにしたら学びに参加できるかをICTを活用したシチュエーションにおいての教育実践を通して検証し、その結果報告を発表した。

●鈴木秀樹先生の現況

インクルーシブ、感性、国語、ICTの四つとその重なりが、私が教育を行ううえでの4本柱です。

国語のことで発表することが多いのですが、ICTを活用するにしても、どの教育をするにしても、インクルーシブ教育の考え方ということが常に基盤にあるということを感じながらやっております。

●佐藤牧子先生の現況

普段は保健室にいて、子どもたちの傷病の手当てや相談などに対応しています。

1日だいたい30人ぐらいの来室があります。一人が何回来ても1と数えているので、実際にはもう少し多い数になります。

学校外ではICTに関係するものや危機と管理、安全教育の番組といったお仕事もしております。

養護教諭の魅力として、保健室というのは子どもたちが来たいとき、必要があるときに来るところで、一方通行的な環境で子どもたちの心身に触れて、手当て・指導を通して関係を育んでいくという、そういう役割があります。

小学校であれば1年生から6年生という縦のつながりで見えていて、全児童と関わりがあります。学校の中でも全員と関係があるという大人は数少ないのではないかなと思います。養護教諭というのはどの学年、管理職とも協応連携して仕事を進めますので、人的環境整備がしやすい立場です。

一番大切だなと思うのは、あなたがあなたであること、それがとても大切だよということを伝えやすい、そういう仕事なのかなと思っています。そういう意味ではwell-being (幸福)、子どもたちが社会的にも心身ともに健康である、そんなことを目指して保健室で仕事をしています。

養護教育としては、今ICT活用を軸にインクルーシブ教育、あとは安全教育、子育て支援ということにも取り組んでいます。養護教諭がなぜインクルーシブ教育とか、そういったことに関わるんですかということをよく言われますが、養護教諭というのは、心身の健康や社会と関わる力の育成というのが役割としてあるんですね。養護教諭はその中で、子どもたちに「心身の健康に関する知識・技能」「自己肯定感」「意思決定・行動選択する力」「他者と関わる力」という力をつけましようと言われていました。

ですからインクルーシブという考えがなければ、特別支援教育であったり、すべてのお子さんたちをサポートするのが難しいと思います。それで、そういったインクルーシブ教育にも取り組んでいます。特別支援教育に養護教諭があまり関わっていないという学校もあるかもしれませんが、養護教諭というのは、心身の健康、もちろん社会面も含めた健康というところでは重要な役割を担っていますので、学びに困難を抱えたお子さんたちの支援にぜひ養護教諭も巻き込んでいただきたいという思いがあります。

1. 鈴木秀樹先生：発表

●東京学芸大学附属小金井小学校におけるICT×インクルーシブ教育のあゆみ

	年	あゆみ
非ICT	2014	文部科学省「インクルーシブ教育システム構築モデル事業」(佐藤が推進)
	2015	東京学芸大学特別開発研究プロジェクト「東京学芸大学附属小学校におけるインクルーシブ教育のシステム構築に関するプロジェクト研究」
	2016	東京学芸大学特別研究プロジェクト(2年目。鈴木着任)
ICT	2017	佐藤・鈴木がATACカンファレンスに参加(坂井先生と衝撃の出会い)
	2018	文部科学省「学習上の支援機器等教材活用評価研究事業」 ICT×インクルーシブ教育セミナー vol.1 開催(以後毎年開催)
	2019	文部科学省「学習上の支援機器等教材活用評価研究事業」[発達障害の可能性のある児童生徒等に対する教科指導法研究事業]
	2020	文部科学省「発達障害の可能性のある児童生徒等に対する教科指導法研究事業」[新時代の教育のための国際協働プログラム]
	2022	書籍『ICT×インクルーシブ教育』刊行
	2023	文部科学省「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」

スタートは2014年です。文部科学省のインクルーシブ教育システム構築モデル事業に採択されて、そこからずっと続いています。もう10年ぐらいいなります。そのときは佐藤先生が推進していました。

それまではICTを使うようなことはなく、2016年に小金井小に私が着任し、ICTを使ってインクルーシブ教育も進めていくことになりました。

こうやって採択されてきているのは、やはり社会における要請なのだと思います。発達障害の可能性のある児童生徒に対する支援が必要とか、学習上の支援に関する研究が必要だとか。今取り組んでいるのは、特定分野に得意な才能のある児童生徒への支援の推進事業ですが、やはりそういうところへの支援が必要だという社会の要請があって、こうしたものに応じて進めているということを感じながらやっています。

システムの話をすると、かつてはこういう感じだったそうです。

●かつての東京学芸大学附属小金井小学校の特別支援教育

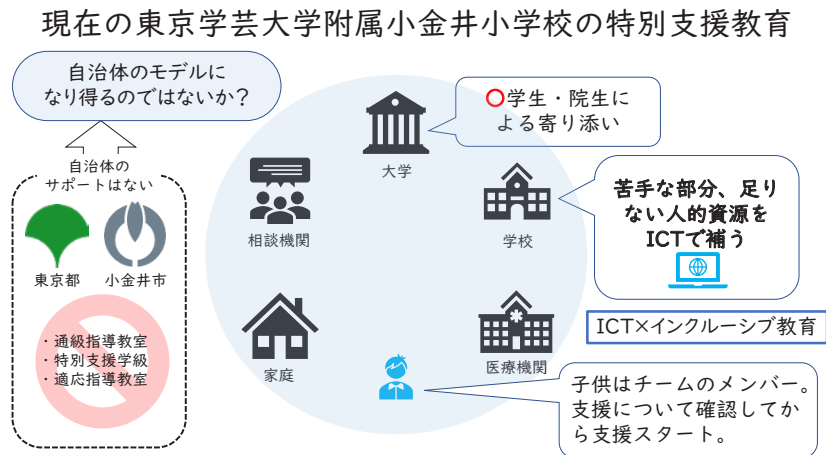
- ・東京都や小金井市といった自治体のサポートを受けられないため、通級指導教室・特別支援学級・適応指導教室がない。
- ・子どもと家庭、子どもと学校、家庭と学校との関わりはあるが、学校で学習に対する個別の支援はできていない。大学の学生・院生による寄り添いをしていた。
- ・学校は、医療機関、相談機関という外部の機関とは直接関わっていない。

主に私が来る前、東京都や小金井市に属しているわけではないので、自治体のサポートがありません。大学と同じキャンパスにあるので、何かあると学生や院生による寄り添いはできましたが、それ以上のことがなか

なか難しい。そのため、学習に対する個別の支援もうまく回らなかったそうです。

●現在の東京学芸大学附属小金井小学校の特別支援教育

- ・子ども、家庭、医療機関、学校、大学、相談機関でチームを作る。
- ・子ども自身もチームのメンバーとして、支援について本人に確認をしてから支援がスタートする。
- ・学校は、苦手な分野、足りない人的資材をICTで補う (ICT×インクルーシブ教育)。
- ・大学では、学生・院生による寄り添いがある。
- ・ICT×インクルーシブ教育の考え方は、自治体のモデルになり得るのではないかな？



現在はいくつかの点で改善をしています。

1. 真ん中に子どもがいたのがこのように変わってきました。子どももチームのメンバーである。だから、支援について子どもに確認してからスタートしています。そして、この子にはこれがいいだろうと周りが勝手に思っ進めるのではなくて、子どもにも聞いて納得してから支援をスタートさせることになっています。
2. 人手が足りないとかそういうところを、ICTを使うことで補ってやっています。ICT×インクルーシブ教育というのを進めています。これを進めていくうちに、なんだかんだ言って自治体のモデルになり得るのではないかと考えています。自治体もいろいろなサポートはありますが、やはりそれが回らないところがあったり、あるいはちょっと機動性に欠けるようなところがあったりしたときに、ICTですぐできるということは結構あるだろうと思います。子どもたちはギガスクール構想でタブレットを手にしていますし、そういったことについて本校で研究していることがモデルになるのではということを考えてやっております。

2. 佐藤牧子：発表

自治体のモデルということについては、足りないリソースについてできるだけお金をかけずに、どうすれば子どもたちの学びの環境が改善されるかということをやっています。

例えば、本当は通級指導教室に行ったほうがいいのかと思うけれども本人や保護者の希望がないとか、そのような環境がすぐに利用できないとか。そうなるとやはり学校、教室でお子さんたちをサポートしていかねばいけい。そのような視点で見ただけだと、私たちのこの実践がもう少し共有しやすいと思います。

学びに困難を抱えているお子さんたちというのは、教室のほうで適応できないということがあると思いま

す。そうすると、本校では適応指導教室などが学校内にありませんので、保健室で過ごすということになります。かつてはリソースルームというのが学校内にありましたが、改修工事で使えない状況なので、今は保健室のみで対応しています。

学級で適応できない自分が駄目だから保健室に来るのだとってしまうお子さんもいたと思います。それは、集団に適応させようという思いが大人にあったからなのではないかと思います。

●保健室(教室外)で過ごす子どもたち

—日本財団「不登校傾向にある子どもの実態調査(2018)」

不登校傾向の中学生33万人アンケート調査より—

中学校に行きたくない理由をいくつかの要素に分けると、疲れ・身体的理由、学習・成績、人間関係の大きく3つに分けられる。ここに出てくる疲れや人間関係は、本人の努力不足とか本人がわがままだからとか、そういった理由で捉えられてしまうこともあるかと思います。小学校の場合でも保健室を利用する子たちというのは、よくよく聞いていくといろいろな困難さを実は抱えていて、ただどう伝えていいかわからない。あとはすごく辛かったけど頑張らなければいけない。それがずっと続いていて、その頑張りが効かなくなって急に教室に行けなくなる、そんなNOが言えない子どもたちというのが、この潜在的な部分ではないかなと思っています。このNOが言えないというところをサポートしていかなければ、教室に適応できないという、不登校になるという状況を改善したいと思っている部分にアプローチができないのかなと思っています。

(保健室を利用する子たちは) これまでは学級に適応できない、行き場がない子たちでした。保健室で安心しやすい環境とICTを使った学習支援、あとは大学院生や学生さんによるサポートで、この疲れや身体的な理由、学習、人間関係についてサポートしていきました。そうすると違った変化が見えてきました。

私たちが関わる中で、**NOと言えなかった部分、今まで言えなかったネガティブな感情を出していいのだという状況になってくると、子どもたちはそういった感情を出したことから自分と向き合っ、それを共有していく。**では、その問題をどうやって変えていこうかというような関わりが変わってきました。

そうする中で、**子どもたちは保健室を自分らしく過ごすための中継地点と捉えるようになってきました。**これはすごく大きな変化だと感じています。子どもたちが保健室にただいるわけではなくて、本当に中継地点として、この教科は教室で受けてみよう、これをオンラインでやってみよう、これは保健室で課題をやろうとかですね。そんな感じで、自分の学びというのを切れないように、いろいろな環境を自分で選択することが出てきました。そういう意味では保健室や養護教諭は、教室と違った環境、評価権を持たないという部分でも、集団生活に困難を抱える子どもたちのハブになり得るのではないかなと考えています。

子どもの居場所というところで考えてみると、子どもを取り巻く環境の中にはもちろん1stプレイスの家庭、2ndプレイスの学校、安心した場所3rdプレイスがあります。今は3rdプレイスが子どもたちにとってとても大事ですよとされています。けれども不登校になったお子さんで、学校に行かないからじゃあ何か好きなことしよう、安心した居場所を作ろうと、切り替えて活動できるお子さんはすごく少ないです。自分が安心したり好きなことに没頭できる場所を見つけるのは、すごく難しいなと思っています。

3rdプレイスの安心した居場所をどのようにして見つけられるかという支援でも、あとはまた学校に行きたいと思ったときの支援のためにも、やはり保健室が中継地点となって、お子さんたちの居場所や学びの場を途切れさせないということが大事なのかなと思います(学校によっては、それは保健室であったり、通級指導教室であったり、図書館であったり、校長室であったり、いろいろな場所がある)。

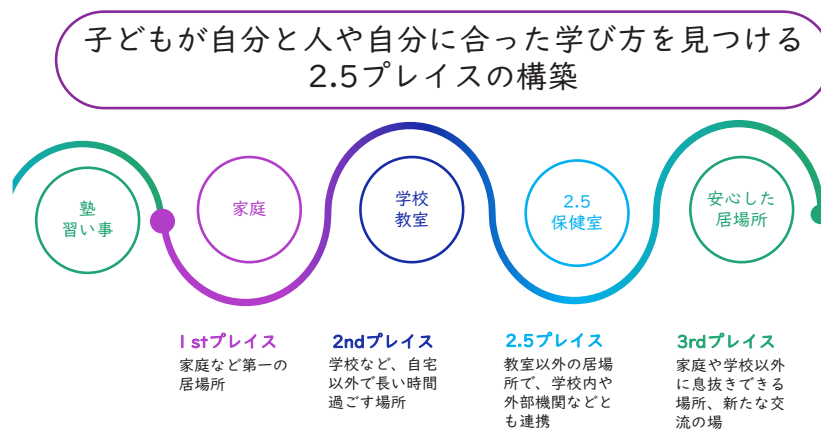
学校と外にある、子どもたちが安心できる居場所を今後はつないでいかなければいけない時代になってきたと思っています。

●子どもの居場所

※子どもが自分と人や自分に合った学び方を見つける2.5プレイスの構築が必要

今は、子どもと外の関係性を途切れさせない2.5プレイスの構築について、保健室を中心に研究を進めているところです。子どもを取り巻くいろいろな環境がありますが、こういったところを包括的にサポートするのが、この子どもの学び困難支援センターの大きな存在になってくるのではないかなと思っています。

今も本当にいろいろなところと連携されていると聞いています。今後私たちもそういったリソースをどう活用していくのか、学校だけでは抱え切れないところを社会でどうサポートしていくのかを進めていきたいと思っています。



3. 授業例 動画で説明 (詳細略)

【事例①：オンライン授業と適切な声かけ】

(動画) 授業をオンラインで受けている事例です。教室でプリントが配布されて、子どもがそのプリントをどうしようかという場面です。保健室ではもうちょっとで(教室に)行けるかなと思って、プッシュしたいなと思って、「取りに行っておいで」と言いたいところでした。しかし、あえて支援者がプリントを取りに行こうかと言ってみます。そうすると、取りに行ってもらえるのと、自分で取りに行くという選択肢が子どもの中で二つになるのです。そのように提案すると、子どもは自分でできるほうを選ぶということで、この子は自分でプリントを取りに行くことができたのです。ほんのちょっとした声かけが変わるということです。

最初から教室に行こうよと言うと、この子はたぶん授業を受けられなかったと思います。やってみて駄目だったから保健室でやっているということもあるのですが、自分のタイミングとか自分が安心できる環境で参加することで、それが成功体験になって徐々に教室に向かっていけるようになりました。

【事例②：読みの支援】

調べ学習で、自分の調べたことをスライドにまとめるとか、(この例では)〇〇市の問題点をグラフにしたり、わかったことなどをまとめたりしていました。こういうのを授業中に作成してきたよって見せてくれた子もいました。Aさんはすごく書字に困難を抱えていて、こういうスライドはとても得意なのですが、書くことは全然できないというお子さんだったのです。「よくできているね、このグラフのどこが問題だと思って書いたの」と聞いたら止まってしまったのです。何だったかなと思ってその市のホームページをもう一回見直したのですが、行政のホームページは文字がすごく多いです。その中から探すのはすごく難しいので、じゃあ

マーシブ機能を使うといいのではないかとということで、読み上げてもらいました。

イマーシブ機能は、クリックすると読み上げてくれて、ほとんど誤変換もないのです。ですから読むのが苦手とか、漢字が苦手というお子さんはこういったものを使うことで、他のお子さんと一緒に授業で活動することができるようになってきました。

どこの学校でも漢字の宿題があると思います。鈴木先生のクラスは漢字の宿題はないと言っていましたが、書字に困難を抱えているお子さんだと、1日何個か書いてくるというような宿題ができない子がいるのです。例えばAさんは見て覚えることが苦手です。エピソード的に覚えるほうが覚えやすいということで、「悪」という字を「一口、はし(!!)で、一心に食べる、悪い人」と覚えるようなカードを使いました。そうしたことばのほうが面白くて覚えやすいので、このようにカードで練習しています。

また、自分の書きやすい大きさと書いていいよと言ったら、その子がこれを書いたのですが、フォントのサイズにするとたぶん72ぐらいの大きさなんです。学校で出ているプリントはもっと小さいですよ。その半分以下みたいなマスタ目だと思うのです。やはりこれも書かせてみて、この位の大きさがAさんにとって見やすい大きさなのだとわかったのです。

これはデジタルのペンで書いているのですが、これの良さは再生機能で後から書き順を確認できるので、書き順を間違えてないかなとか、そういったことも確認できることです。これはホワイトボードというのですが、これを共有して手で書いたものを自分のタイミングで確認できる。間違えたら消しゴムでポンと押せば消えます。そういったことで書いたり消したりという負担はかなり減って、前向きに漢字の練習をするようになりました。

【事例③：音読支援】

次は、読み上げが苦手な、音読も苦手なBさんの事例です。これにはAIのロボットと一緒に練習してみようということを提案しました。このお子さんはとても真面目で、単元が始まる前に国語の文章をおうちで練習してきます。でも、全然うまくいかなくて、1日に1時間2時間練習したのだけどうまく読めませんと言って、だんだん嫌になってしまったのです。国語の授業を受けるのも嫌だとなってきた状態でお話を伺って、学校でちょっと違う練習をしてみようということでロボットを使いました。このロボットにテキスト入力すると読み上げてくれるのです。

(動画) 初読の状態はたどたどしい感じなのですが、Bさんと同じ位の読みのお子さんはどの学校にもいるのではないかなと思います。

この文章をBさんには初読で読んでもらって、かかった時間や間違えた箇所を測って、その後ロボットで読み上げを聞きます。文字と音の一致も難しかったので、それをロボットに変えてもらいました。その後、自分で読んでみるということをやりました。

(動画) これはロボットが読み上げている動画です。文節がめちゃくちゃで、ちょっと発音も違ったりします。あまり上手ではない読み上げのロボットですが、Bさんは結構気に入って使っています。これで文字と音を一致させた後の読みの動画です。

1回読んだだけなのですが、とても変化がありました。やはりこの実践で思ったのは、人前で読むとかそれをチェックされるのは、子どもにとって心理的な負担が大きいということです。子どもにこの音声読み合いの何が良かったのか聞いてみると、自分のタイミングで間違ってもやり直せることと、やはりロボットという存在が可愛らしく楽しかったということ。最後までできたことが嬉しかったということでした。一番良かったのが、ロボットも読みが上手ではないから安心したということでした。やはり心理的な安心感が支援を進めるうえで、とても大事だということを教えてくれた事例でした。

【事例④：音読支援】

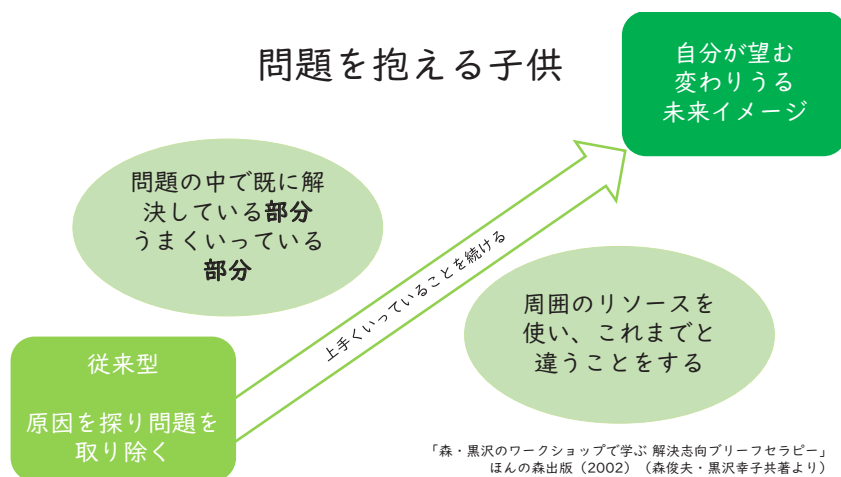
次は、話していると自分が何を話していたか途中でわからなくなってしまうさCさんです。頭の回転がすごく速くて賢いお子さんですが、話しても残っていないと忘れてしまいます。何とかしたいと最初、私がメモを取っていました。でも（話を）聞いてほしいから下を向いているのも嫌だということでした。どうしようかなと考えてデジタルノートのディクテーション機能というものを使いました。

（画像）ディクテーション機能を私がコピーして、私とCさんのところを色で分けしました。「今日の困ったことを教えてください」と書いて、「朝から学校に来るのが辛かった、本当は業間休みに行きたかった、パパが行きなさいって言ったから、それはその日になってみないとわからない」という感じで話していきます。実はこれ、子どもが今日担任の先生にこういう困ったことを相談したいということだったのです。この中でどれが言いたかったのと聞いたら、「予定表をわかるようにしてほしい、次の日何をやるかわからないのは心配だからわかるようにしてほしい」と。

実はこの担任の先生はもうやってくれていたのですが、どこに連絡が来ているのかというのがCさんにはわかっていたのですね。これもやはり、自分では口頭で言えないのです。このスライドやノートを持って行って、自分で「先生これ読んで」みたいな感じでやっと伝えられたということです。ちゃんと言葉で言えないみたいと言われることが学校ではよくあると思います。そこも子どもたちに選択肢を増やすことで、できることがあるのではないかなと思います。

できないことを改善しようと、原因を探って問題を取り除こうというのがこれまでの問題解決の仕方だったと思います。心理学の黒沢幸子先生に教えていただいたのが、問題の中ですでに解決している部分やうまくいっている部分を続けてくださいということでした。また、周囲のリソースを使ってこれまでと違ったことを取り入れてみてくださいということでした。（スライド12）

うまくいっていることを続けると変容が起こって、自分が望む、変わり得るイメージというのをつかみやすくと。そうすることで、「やりたい」とか「これだったらできるかな」という子どものチャレンジにつながるのではないかなと思っています。今はこの考え方を積極的に取り入れて、子どもたちの支援にも生かしています。これは解決思考アプローチと言うのですが、自分で決めるといふ、その価値はすごく大きいのではないかなと思います。



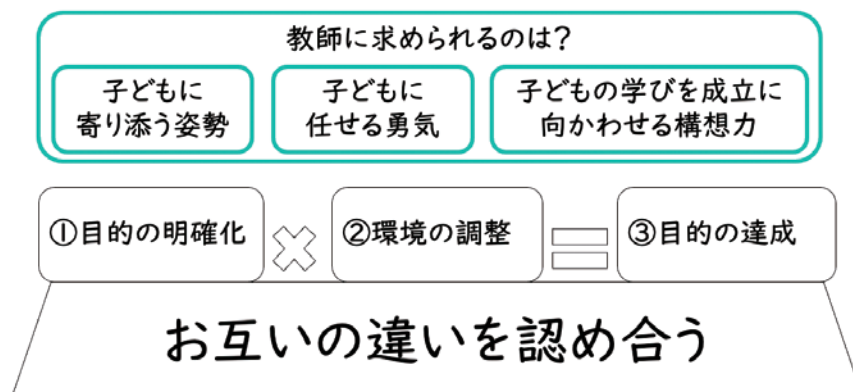
4. 対談

●ICT×インクルーシブ教育のポイント

③②が他の児童にも良い影響を与え、①の達成へ導くことになる

- ・ICTを活用してコミュニケーションが円滑になった。
- ・子どものなかで、その場で手を挙げなさいと言っても挙げられない子どもでもオンラインで回答しない子はいなくなった。ICTの場では自分の力を発揮できるようになった。
- ・かつての昭和の学びは選択肢が少なく先生の言うとおりに学ぶのが正しいと子どもに思わせる学びだったが、先生の前で気の利いた何人かが黒板にまとめるようになった。
- ・子どもたちがタブレットを手にしたことで学びの選択肢が広がった。
- ・かつての学びはFace to Faceで向かい合っていた教育だったが、今の子どもたちはSide by Sideで寄り添う、そういう存在に教師がかわってきた。
- ・物語を読んで登場人物の気持ちが変わった理由を考えるという国語の授業で、子どもにさせたいのは、読むことなのか。それとも考えることなのか。考えることなら読む方はICT音声読み上げでもよい。
- ・考えたことを文章で表現する。鉛筆で書かせることが大切なのか。考えを表すことなら、タイピングでよいのではないか。

ICT×インクルーシブ教育のポイント



5. 質疑応答 (一部抜粋)

- ・**鈴木先生**：やはり学習指導要領をよく読み込んだほうがいだろうなと思います。指導要領はもちろん離れられないですけども、教科書は離れてもいい部分もあると思います。学習指導要領に書かれていることは実はそんなに事細かくないです。例えば、算数で教科書に載っている問題全部をやらなかつたら指導要領の目的が達成できないかという、そんなことないわけです。それだけでもやはり幅ができると思うのです。指導要領をよく読み込んで教科書を見て、どれくらい今自分には幅があるのかなと、教師のほうが思っておくことは大事じゃないかと思います。
- ・**鈴木先生**：私も昭和の人間ですが、本当に授業のあり方を変えるということが教育改革とずっと昔から言われてきたわけです。やはりタブレットが入ったのは相当大きなことだと思っています。ここで授業のあり方

を変えなかったらいつ変えるという場面に立ち会っているわけです。だいぶ変わってきたとは思いますが、まだ充分でないところもあるかなと。そこは格差が生まれているところだと思います。まだ変わっていないところは、どんどん変わってほしいなと思います。

